



WE, JOKERS

英語のジョークを楽しむ会会報

No.51 October 10, 2015

- ジョークの心得三か条:
1. ジョークは心のゆとりであり、人生の潤滑油です。
 2. ジョークで言語の壁に挑むのは知的快感です。
 3. ジョークは簡潔が至上です。



[第51回研究発表会]

老愁快笑剤

草野 淳



老境は死よりも強い苦しみ、とはフランスの作家モーパッサンの言葉だが、人は皆、老いるとともに憂い悩む。そんな苦しみを笑って心晴らせれば、と老いにまつわるジョークを拾い集めてみようと思い立った。考えついたタイトルが「老愁快笑剤」。

「老臭でしょうよ」ときつい家庭内アドバイスもあったが、品位とプライドを保って私自身は「老愁～」のままでいった。老いの悩みなんか笑い飛ばしてほしい、と自らも八十に手が届くようになった私の思い入れを、ご笑味願いたい。

年を取ると誰も物忘れが多くなる。知人・友人の名前が出てこなくなったり、顔を見ても誰だったか思い出せない。男はズボンの前を締め忘れる。forget to zipper upが果ては“Then you forget to zipper down.”とまで進むとわが身に“実害”もおよぶ。

あの名宰相チャーチルも、議会で答弁に立ったさい、“Your fly is open, sir.”と秘書に耳元で注意されたことがあった。が、さすがの大物、その時あわてずで、“Oh, that’s all right. The bird doesn’t fly out of the nest anymore.”と悠々とかわしてみせたそうだ。

風刺漫画が売り物の一つにもなっているアメリカの高級雑誌 New Yorker に、バーのカウンターで老人が横の中年男に、“I forget to drink.”と寂しそうに打ち明けているひとコマが載っていた。酒を飲むことも忘れてしまうようになるとはわびしい話。老いの身には「ただたのむタベの友」のはずなのに。

老いて耳が遠くなったことをからかったジョーク：90才の誕生祝いに息子たちの計らいで風俗嬢を自宅に呼んでもらった爺さん、彼女から、“I’m here to give you super sex!”と熱くささやかれると、“I’ll take the soup.”という返事。“soup or sex”と聞き違えたのだった。

シーンと静まり返った教会のミサで、老夫婦の夫人が、“I’ve just done a silent fart. What do you think I should do?”と夫に助けを求めると、“Put a new battery in your hearing aid.”と言われてしまった。補聴器の次は入れ歯の話。老いた妻が、“When you were younger, you used to nibble on my ear.”と甘える。すると夫が、“Excuse me. I’ll be right back. I’m

going to get my teeth.”では興奮めだ。

入れ歯同士の会話はこんな調子にもなる時が一

老人 A: “Today’s Wednesday, isn’t it?”

老人 B: “No, Thursday.”

老人 A: “Thirsty?” Let’s have a glass of beer then.”

老いても男 vs. 女は永遠のテーマ。New Yorker 誌の漫画が傑作だ。プレゼントらしい包みを膝の上に初老の婦人が、向こうにいる夫に聞こえよがしに、“An anniversary present? For me? I remembered? Well, thank me very much.” 「私、よく憶えてくれたのね？ 私ってなんてやさしいの、どうもありがとう！」と自分自身に語りかけているところが、亭主への強烈なあてつけなのだ。

同誌のもう一つの漫画：夕食後のひとときか居間で老夫婦がしみじみと語り合う。“Well, the children are grown up, married, divorced, and remarried. I guess our job is done.” 老後の虚脱感と現代アメリカ社会の世相が切々と伝わってくるではないか。

もっと刺激的なのを好む向きには：静かに語り合っていた老夫婦の夫が、いきなりばあさんのほっぺたをピシャッと平手打ち。Ma said, “What was that for?” Pa said, “For forty years of bad sex.” むっとした婆さん、少し間を置いて何やら考えていた様子だったが、Then Ma reached over and slapped Pa. 同じように、いやむしろ爺さんよりもはるかに強くピターン、とやり返した。こんどは爺さんが、“What was that for?” と問い返すと、Ma said, “For knowing the

difference.”とズバリひと言。実に見事な返し技である。

年を喰うと恥ずかしさも無くなるのか。街角で老婆が突風でスカートをまくり上げられ、あられもない姿に。でも婆さん、下半身の露出にはいっこうに構わず、むしろかぶっている帽子を飛ばされないようにしっかり手で押さえている。目撃した警官が、“Look lady, while you’re holding on to your bonnet, you’re showing the whole world your package down there.” とセクハラに注意したのかなんとも絶妙な表現で声をかけたのだが、婆さんは平然として、“Listen Mr., what they’re getting an eyefull of is 90 years old. This hat, however, is brand new.” とうそぶいたそうだ。

年の功は、淑女であるはずのレディーを図々しくさせる。かなり高齢の婦人と少年がエレベーターに乗り合わせた。And a horrible smell filled the car. Finally the kid said, “Excuse me for asking, lady, but did you fart?” すると老婦人は堂々と切り返した。“Of course I did. Think I always smell like that?” (「もちろんガスったわよ。普段からこんな臭い女と思わないで！) 加齢臭持ちと思われてはたまらない、という高齢女性の抗議の感情が痛いほど伝わってくる。

祖父達の孫自慢は世界共通。No cowboy was ever faster on the draw than a grandparent pulling a baby picture out of a wallet. さっと抜いて見せる手さばきはガンマン顔負けだ。

年寄りの思考はとかく自分中心。An old man was sitting on his porch when a driver stopped to ask for directions. "How do you get into town?" The old man replied: "Usually my son takes me." 英文法 how の用法の見本のようなジョークである。

お若いですね、と言われたらまずは、It may be sure that they think you are growing old. と思うべし。喜ぶのはおばかさん、と戒めている現実的ジョークもある。そこで老化のシグナルなるものをリストアップした

"You can tell you are getting older when:

- ・ You sit in a rocking chair and can't get it going.
- ・ You burn the midnight oil after 8:00 P. M.
- ・ Your little black book contains only names ending in M. D.
- ・ You decide to procrastinate and never get around to it.
- ・ You walk with your head high, trying to get used to your bifocals.
- ・ You sink your teeth into a steak and they stay there.

やれやれ、わが身に当てはまる項目はあったらどうか？

前出の雑誌の漫画に、公園で犬を散歩させている男と、カメに紐を付けて引っ張っている禿げ老人が出会った光景が描かれ、説明文句は、"My doctor told me to take it easy." 実際にこうまで出来れば人生の黄昏もほほえましく映って見える。

だが、究極の老愁は、なんといっても死への恐れと不安だろう。だからこそ、My grand-

father's death was ironic .He died in his living room. なんて不謹慎にも茶化したくなる。病状深刻な患者に診断結果を聞かれ、"Well, put it this way: I wouldn't start reading a long book." とさり気なく悟らせる粋なドクターのユーモアセンス。老いて明日はわからぬ命なら、"Who wants to wash clothes on the last day of their life?" 独り暮らしの孤老のつぶやきが聞こえてくるようだ。

生前に注文を済ませて置こう、とひつぎ屋を訪れた老カップルが、店の主人に、"No, the urns are pretty much one size fits all." (骨つぼのほうはどれも同じサイズでございます)と、棚の上に並んだつぼを指して素っ気無く言われ、ぼう然とした表情の二人。そんな構図の New Yorker 誌の漫画もあった。「焼き捨てて日記の灰のこれだけか」と詠んだ、死期迫った寂寥の俳人、種田山頭火の心境にも通ずるようではないか。

死をテーマにした老いのユーモアのタネは尽きない。結婚式で居合わせるたびに、意地悪い叔母達からいつも脇を小突かれては、"You're next." と嫌がらせを言われて腹にすえかねていた年増の女性が一計を案じ、"She started the same to them, her elderly aunts, at funerals and they just stopped." くすりがピタリと効いたのである。むべなるかな。

あれ、それ、ばかりが口を継ぎ名前も地名もなかなか出て来ない年寄り特有の senior moment という厄介な現象。これを実感たっぷりに解説しているのが、米紙 New York Times の定期欄 Language を長いこと担当し

ていたコラムニスト、William Safire の以下の記事である。

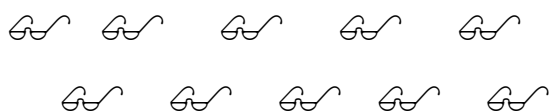
We all have experienced the phenomenon known as a senior moment, and it occurs more frequently as we get older. We can't come up with a name. We know all about the person...but no name. Frantically we try to come up with a first letter...and are usually wrong. In despair, we turn our attention to something else. Then, seemingly out of the blue, the name pops up. The prototypical senior moment.

思わず膝を打って、“Aha, that's...”と躍動感を味わうからか、Aha moment とも言われる。

だが、この老齡悲哀のタイムラグを、心優しく慰め、かつ励ましてもくれる脳機能の解説がここにある：

The larger the library you have in your head, the longer it takes to find a particular word(or word pair). It's not you're slow. It's that you know so much. ここまできてこの英文を力強く読みあげると、シニアクラスの部類に入る会員も少なくない聴衆から、どっと歓声が上がったものだ。

アメリカのある心理学者は、人生 82~85 才が幸せ感のピークだ、とも説いているから希望が湧く。終わりに「人の老いるをおそれず、只心の老いるをおそる」との古代中国の俗諺に付け加えて「須(すべか)らくユーモア心の枯れるをおそるべし」と、自戒の念をも込めて。



第 28 回
ジョーク・コンテスト
MC の記
熊崎 清子

今月の会は世間が行楽で沸くシルバーウィークの連休初日。新会員の美女 2 人とオブザーバー 1 人を加えて、出席者は計 20 名、寄せられた作品は 17 題でした。

一位は 7 番。(村井さん)

There's a picture of a gorgeous naked women with only her privates covered with leaves at a gallery. The husband keeps looking. Wife: "What are you waiting for?" Husband: "Autumn."

裸の女性の絵の前に立つ夫に「何を待っているの」と妻。一言「秋」と夫。秋になれば葉が落ちて、覆われている所が見えるだろうという期待のおかしさに、多数の票が。葉は秋になっても落ちるだろうか、という水を差す声がありました。

二位は僅差で 15 番。(豊田さん)

I come from a small town where the population never changes. Every time a baby is born, some guy immediately leaves town.

赤ん坊が産まれた途端無責任な男がこっそり出ていくため、人口がいつも変わらない町。人口が不変の背後にある理由が、意表をつくおかしさ。「私はそこから来た」ということは「私」も逃げてきた？ 子供の顔を見れば、誰が父親かすぐわかるからね、と言う声あり。

三位は同点 2 名で、まず 1 番。(中嶋さん)

Fairy tales begin either with “Once upon a time,” or “If I am elected...”

御伽話は「昔々」か「自分が議員/大統領に選ばれたら」で始まる…。Or で続けた文が効いていて、多くの支持が。ちなみにロシアの御伽話は「やがていつかは」で始まるそうですが…。

同じく三位は 14 番（今井さん）

“Does your husband have likes and dislikes about food?” “No, he likes everything. When I cook meat he likes fish and he likes meat when I cook fish.”

夫には好き嫌いが無いから、肉を作ってやれば魚、魚の時は肉が好きというのよ、と言いつつ妻。最初、あれ？ で、次の瞬間、ああ、とわかるほんわりとした科白が気が利いていて、票が集まりました。この夫は bossy なわけではなく、妻の料理が下手なだけでは、という現実的な感想あり。

ジョークは日々の生活からということか、家族のネタが多いですね。賞からもれた作品にも、挿絵が引き出してくれるイメージと相まって、秤がちょうどいい具合に傾いて、心地よい笑いのジョブを与えてくれるものがありました。

たとえば 11 番の「自分は Hamlet actor だ」と胸をはる役者に対し let を取って ham actor (=大根役者) と言り返す科白。下手な役者ほどハムレットを演じたがるそうですが、こんなふうに瞬時に返すには長い修行がいりそうです。

また共和党候補者には、あなたたちでもなれると小学生に言う先生（13 番）。共和党出身の大統領を皮肉っているのかと思いましたが、共和党の候補者の数の多さを皮肉ってい

るとのこと。そういえばニュースで、壇上にずらりと並んだ候補者の多さに目を見張ったばかりで、timely な風刺でした。

反省点として、竜宮を後にして怪物蟹の群れに襲われる浦島の落ち（3 番）とは。会の後で「こはいかに＝怖い蟹」だと知りました。会の時に、皆さんにお伝えすべきところでした。申し訳ありません。

緊張して手続きを忘れてたり、段取り悪く進めてしまった私に、とてもあたたかな応援をいただき、ありがとうございました。

英語のジョーク超入門講座 第3回 地名のジョーク 豊田 一男



今回は地名の絡むジョークです。単純なものからやや複雑なものへと進みます。

“What is the capital of France?”

“F.”

（「フランスの首都はどこですか」「F です」）
capital: 「首都」と「頭文字」の取り違えの駄じゃれです。

Q: What part of London is in France?

A: The letter “N.”

（「ロンドンのどの地域がフランスにありますか」「N の文字です」）

London と France の文字の遊びです。

“What country is useful at meal times?”

“China.”

（食事の時に役に立つ国はどこですか」「中国です」）

China(中国)と china (陶磁器)の駄じゃれ

です。

“Which country is always starving?”

“Hungary!”

(「いつも飢え死にしそうな国はどの国ですか」「ハンガリーです」)

国名の Hungary と hungry (空腹の) の駄じゃれです。

“What’s the most slippery country in the world?”

“Greece!”

(「世界で最も滑りやすい国はどこですか」「ギリシャです」)

国名の Greece と grease (獣脂、グリース) の駄じゃれです。

Teacher: Mark, where does your mom come from?

Mark: Alaska.

Teacher: Don’t bother. I’ll ask her myself.

(先生とマークの対話:「マーク、お母さんはどこの出身なの」「アラスカです」「わざわざ聞かなくていいわ。わたし自分で聞くから」)

先生は Alaska を I’ll ask her (ぼく聞いてみます)と取り違えたのです。

Teacher: Which is the richest country in the world?

Pupil: Ireland.

Teacher: Why do you say that?

Pupil: Because her capital’s been Dublin for years.

(先生と生徒の対話:「世界で最も豊かな国はどこですか」「アイルランドです」「どうしてそんなことを言うの」「首都が何年もずっとダブリンだからです」)

Capital:「首都」と「資本」、Dublin (ダブリン)と doubling (2倍になる)の二重の駄じゃれです。アイルランドは資本金が何年も2倍になってきているから豊かだ、というのです。

Jamaica good grade in school today?

(今日学校で良い点を取ったかい)

“Did you make a”を速く発音してみてください。古典的な駄じゃれです。

第52回研究発表会のご案内

会員各位のご参加をお待ちします。まだ会員になっておられない方もどうぞ。

- 日時: **2015年11月21日(土)**
14:00~16:00
 - 会場: **日本近代文学館** (2階会議室)
(東京都目黒区駒場4-3-55、駒場公園内)
電話: 03-3468-4181
 - 交通: 京王井の頭線「駒場東大前」駅(渋谷駅から二つ目)下車徒歩約7分。は、「日本近代文学館」のHPでご検索ください。
 - プログラム
総合司会=豊田一男会員
 - ① 研究発表
「GRAVE MATTERS」土屋政雄会員
 - ② 第29回ジョーク・コンテスト
MC=岡田茂富会員
- 参加費: 会員・非会員とも1,000円
連絡先: jlcweb-renraku@eigojoker.com

第29回ジョーク・コンテスト出品募集

1. 語数は、**30 WORDS** を上限とします。
 2. 出題数は**お一人一題**までとします。
 3. コンテストは、2015年11月21日(土)の第52回研究発表会で行われます。
- 宛先: jlcweb-renraku@eigojoker.com
 - 締め切り: **2015年11月8日(日)**